

# 木村定三コレクションM318単龍環頭大刀の検討2 —保存処理後の再調査—

滋賀県立大学 金 宇大

## はじめに

木村定三コレクションには、韓国の公州武寧王陵出土単龍環頭大刀の直接的な類例とみられる非常に稀有な単龍環頭大刀柄頭M318（以下、M318刀）が含まれる。その希少性・重要性に鑑み、資料の特徴の詳述とその評価を試みた小文を本誌第25号木村定三コレクション編に寄稿した（金2019）。しかし、前稿での観察時は、表面の錆化などのため外環文様の全体像の把握が困難で、暫定的な図化と観察に留まっていた。

その後M318刀は、元興寺文化財研究所に委託され保存修復処理が施された。その際、処理にともない実体顕微鏡による微小部観察および画像撮影、蛍光X線分析による材質確認、X線CT撮影による構造の精査といった自然科学分析が実施され、処理前の肉眼観察では究明し得なかった様々な情報が明らかとなった。本稿では、保存処理後の再調査による新たな所見を踏まえ、改めてM318刀の評価を試みたい。

## 1. 再調査による新たな所見

保存修復処理においては、錆の下に残る鍍金層の保護のため、環頭表面の錆の除去は最小限に留められたが、X線CT撮影により鉄錆層の内側の情報が得られたことで、外環文様の全体像が明らかとなった。また、肉眼観察のみでは把握できなかった茎部の構造が判明した。そこで、保存処理後の資料に再実見調査を実施し、改めて実測図を作成した（図1）。以下、前稿での観察において誤認していた点や新たに認識できた点を整理する。なお、下記の所見のうち、茎部の構造と環頭茎の鋳上がり、装具の材質および構造、佩裏面の繊維痕跡に関する記述は、保存処理および分析を担当した元興寺文化財研究所の山口繁生氏の報告に基づくものであることを明記しておく。

**図像表現** クリーニング後の再観察およびX線CT撮影による三次元モデルの検討の結果、中心飾および外環文様の全体像がほぼ把握できた。中心飾については、処理前にやや不明瞭であった佩裏面の顎毛付近、表裏面の顎毛のラインを明確に確認・図化できた。外環では、錆のため詳細が不分明であった文様の細部、すなわち2頭の龍を構成する各パーツとその構図を認識した。外環龍文は2条の顎毛を備え、耳と目の上に二つの冠毛が付随する角が後方に伸びる。角の上には龍の前肢が右向きに配置される。後肢は前肢と異なり爪の数が2本に減少している。龍文の下半身には尾が表現されており、先端はいずれも佩表側に曲がる。

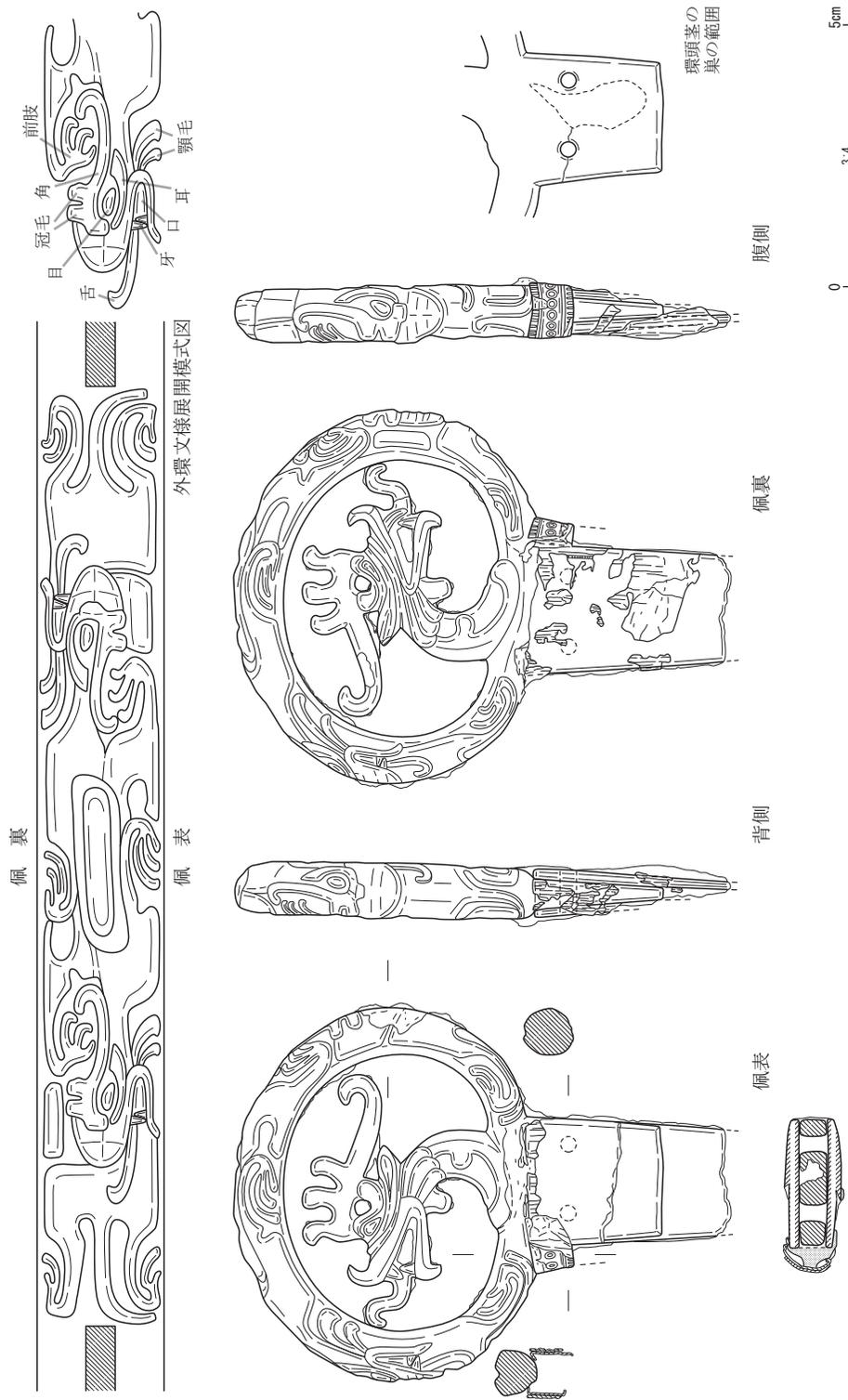


図1 木村定三コレクションM318単龍環頭大刀柄頭実測図および外環文様展開模式図

**装具の材質・構造** M318刀は、外環と茎の接合部に双連珠魚々子文責金具および銀製柄装具の一部を残している。前稿では、銀製装具片についても責金具の一部と認識し、銀地金張ないし銀地金銅張の二層構造でつくられた双連珠魚々子文責金具であると推定したが、今回のX線CT撮影により、責金具の下に重なっている銀板の端部が把木の内側に折り込まれていることが判明した(図1)。このことから、銀板は双連珠魚々子文責金具の地板ではなく、柄木を覆っていた銀製の筒金具がわずかに遺存したものであると判断できる。つまり、双連珠魚々子文責金具は1枚の金銅板でつくられたものであり、元来は銀製筒金具の上に金銅製責金具を重ねた外装であったと復元できる。

**茎部の構造** 前稿では、外環と一体の銅製茎が先端まで伸びており、これに鉄錆が付着しているものと判断した。しかし、X線CT撮影の結果、半ばまで遺存する銅製の茎を両面から鉄製の板材で挟み込む構造であることが明らかとなった。環頭茎は、長さ2.6cm、幅2.1~2.5cmで、先端に向けて厚みを減じる。茎端から1.7cmの位置に二つの目釘孔を横並びに設け、上下の鉄板と鉸接・固定してある。

また、同じくX線CT撮影によって、環頭茎の中央付近に湯回り不良によるとみられる大きな巣があることがわかる。さらに、目釘孔周囲にも亀裂が入っていることが確認されており、茎部の鑄上りはあまり良好ではないといえる。

なお、佩裏面の茎部には柄木とみられる木質が遺存しているが、一部に繊維状の有機質の付着も確認される。

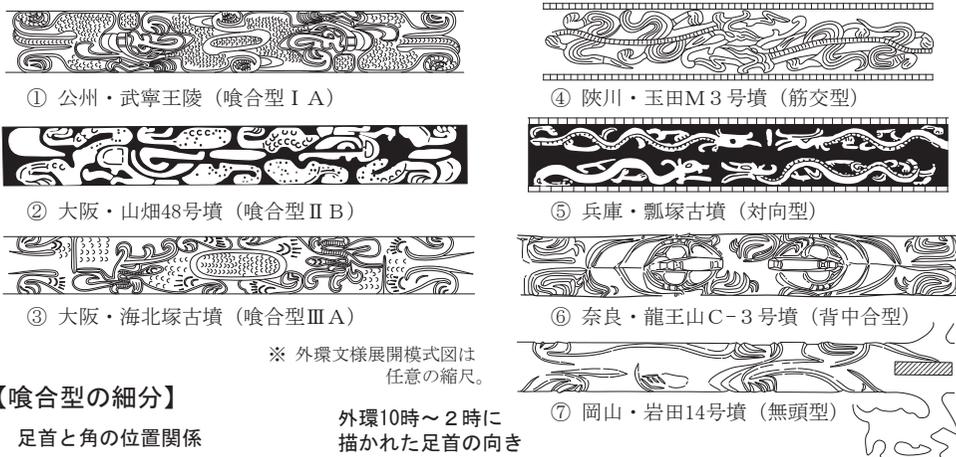
## 2. 文様および構造の特徴と類例比較

### (1) 外環文様

前稿では、M318刀が日本列島出土単龍環頭大刀の型式学的プロトタイプに位置付け得る公州武寧王陵刀と中心飾の文様細部が共通する唯一の例であることを指摘した(金2019:74)。今回、新たに外環文様の全体像が明らかとなったことを踏まえ、改めて武寧王陵出土の単龍環頭大刀との比較を試みる。

まず、龍鳳文環頭大刀の外環文様に関する先学の研究を整理しておく。穴沢味光・馬目純一両氏は、主に朝鮮半島で出土した龍鳳文環頭大刀の分析に際し、これらの外環に施された龍文を分類し、「環を上からみて、2頭の龍が相互に反対方向にすれちがっているものを「筋交型」、側面から見て2頭の龍が相互に相手の尾を喰み向っているものを「喰合型」、側面から見て2頭の龍が相対して口を開いているものを「対向型」と呼称した(穴沢・馬目1976:22)。

その後、日本列島出土の単龍・単鳳環頭大刀を検討した大谷晃二氏により外環文様の分類研究が深化する。氏は、上記3種に加え、「2匹の鳳凰が背中合わせに並ぶように見える」(大谷2016:6)構図をとる「背中合型」、「環の中心飾りを頭部として、その胴体・脚・



※ 外環文様展開模式図は  
任意の縮尺。

### 【喰合型の細分】

足首と角の位置関係



外環10時～2時に  
描かれた足首の向き

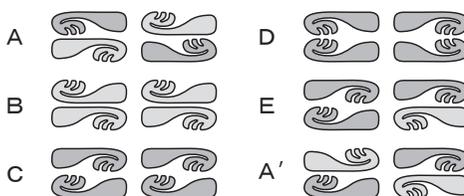


図2 大谷晃二氏による龍鳳文環頭大刀の外環文様分類

尾を環部に表現」する「無頭型」(大谷2006:158)を設定した<sup>(1)</sup>。その上で、喰合型の細分を試み、「環部10時から2時の位置に描かれた4脚の足首の向き(A~E・A')」と「足首と角の位置関係(I~III)」の組み合わせにより分類した(図2)。以下、氏の分類にしたがい、検討を進める。

M318刀の外環文様は、「喰合型I A」に該当する<sup>(2)</sup>。喰合型I Aの構図をとる単龍・単鳳環頭大刀は、現状、公州武寧王陵刀と旧小倉コレクション313伝昌寧出土刀の2例のみである(金2019:76)。このうち、後者は龍の頭部表現が識別困難なほどに退化しており(大谷2006:159)、M318刀のそれとは大きく異なる。現状、日本列島で出土した単龍・単鳳環頭大刀には、喰合型I Aの文様構成を採るものは認められない。

さらに詳しく武寧王陵刀との比較を進めてみたい(図3)。まずは細かな共通点を挙げていく。①龍の下半身に尾が先端まで表現されている。尾を先端まで描いた事例は日本列島出土例ではほとんどみられない<sup>(3)</sup>。②外環3時の位置、2頭の龍の頭部上方に、胴体から独立した鳥状の部位が認められる。③外環1時の位置、それぞれの龍の左前肢に接す

(1) このほか、一部の獅嚙環頭大刀にのみ認められる外環文様として、環部表裏にそれぞれ一体の走龍を描くが、環の右側に頭部を、左側に尾または脚を配置する「完周型」を設定している(大谷2006:158)。  
(2) ただし、M318刀の前肢の爪のうち2本は角と冠毛の間に入り込んでおり、厳密には喰合型IとIIの中間的な型式と解することもできる。本稿では、一番右の爪と角の位置関係を重視して喰合型I Aと判断した。なお、こうした特徴は喰合型II Aとの連続性を示すものとして解釈し得る可能性がある。  
(3) 尾を表現した事例は、上述の伝昌寧出土刀や岡山県岩田14号墳例(大谷2018)など、単龍・単鳳環頭大刀では極めて限られる。

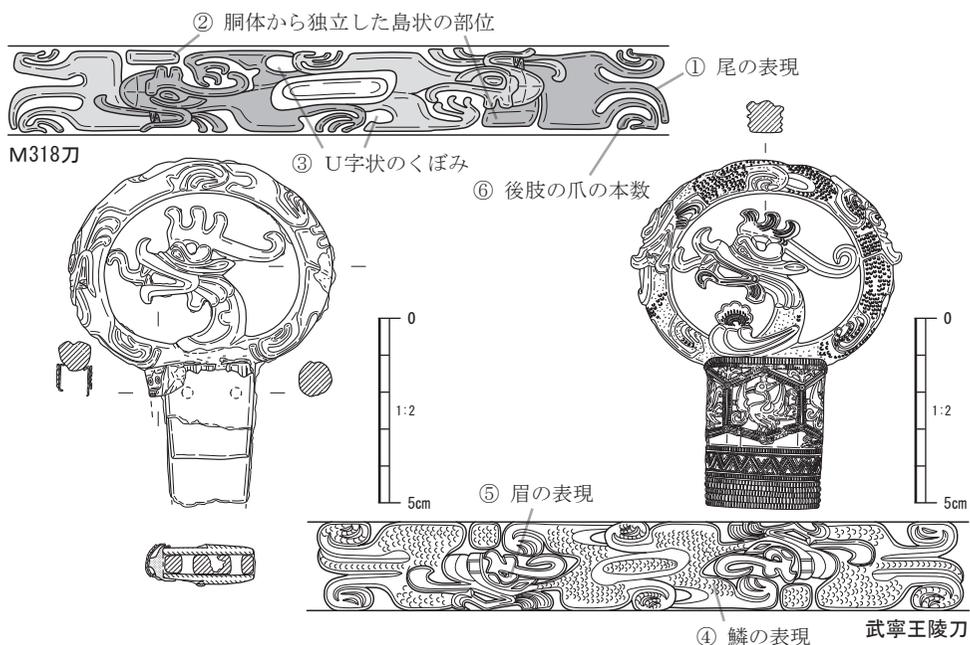


図3 M318刀と武寧王陵刀の文様比較

る、もう1頭の右前肢後方の胴部にU字状のくぼみが認められる。このように、「足首の向き」や「足首と角の位置関係」以外の細かな文様構図においても、両資料には高い共通性が確認される。

一方で差異も認められる。まず、前稿でも指摘した④鱗表現の有無である。M318刀の保存処理の結果、鱗の表現がないことが確実となった。このことは、脚にまでびっしりと鱗表現が刻まれた武寧王陵刀との最も大きな相違点である。次に、⑤顔のパーツ表現の差異、具体的には眉の有無が挙げられる。武寧王陵刀では、龍の目と角の間に眉が表現されるが、M318刀ではそれらが省略されている。また、⑥後肢の爪の数がM318刀では2本に減っている。これらの点に鑑みると、M318刀の外環文様は、武寧王陵刀に比べて若干の形骸化が進行している可能性を指摘し得る。

## (2) 茎部の構造

前述のとおり、X線CT撮影により茎部の構造が明らかとなった。横並びに二つの目釘孔を穿ち、上下を板状の鉄製部材で挟み込んで刀身部に接続する構造<sup>(4)</sup>については、福岡県西堂古賀崎古墳例(岡部・大谷2015:6)や群馬県小泉長塚古墳例(長井編2006)など、日本列島出土資料にも類例がある。一方、武寧王陵刀は、X線CT撮影によって縦方向に二つの目釘孔が並んだ構造であることが知られており(国立公州博物館2011:90)、やや

(4) 近年実施された、奈良県吉備塚古墳出土三累環頭大刀のデジタルX線撮影による検討では、環頭茎を刀身本体と別づくりになった袋状の鉄製茎に挿し込んで鉄製鉸により固定する構造であると推定されている(須山ほか2023:126)。

差異をみせる。ただし、側面CT画像では環頭茎の上下に鉄茎らしき影が映り込んでおり（崔2014：55）、分析担当者の崔基殷は刀身茎と環頭茎を重ねた逆側にもう一枚の鉄茎を添えたか、刀身茎の先端をY字形に加工して環頭茎を挟み込んだものと推定している（崔2014：39）<sup>(5)</sup>。あるいはM318刀と同様の鉄板挟み込み構造である可能性があると考ええる。

## おわりに

以上、M318刀の再調査とその成果を踏まえて、武寧王陵刀との比較検討を試みた。結果、その高い共通性がより具体的に明らかとなった。百済の王が所持した大刀の、国内外唯一の直接的類例であることを改めて確認したことで、その学術的価値の高さがさらに明確になったと考える。

最後に、M318刀の製作年代について考察し、結びにかえたい。武寧王陵刀の製作年代については、武寧王の没年である523年を下ることはない。一方、王妃の副葬品で、庚子年（520年）の銘をもつ銀製腕輪には、武寧王陵刀の外環文様と類似する龍文が施されている。文様の共通性からこれらの製作年代が近いとすれば、武寧王陵刀も520年前後の製作と推定できる（新納1982：136-137）。M318刀は、文様の表現や構図が細部まで武寧王陵刀と共通する一方で、鱗や眉などが省略されている。こうした違いは必ずしも時期的な差異と理解できるわけではないが、後出的要素となる可能性を加味すると、M318刀の製作年代は6世紀前半でもやや新しい時期、百済において製作されたと推測できる。

## 謝辞

本稿の作成に際しましては、愛知県美術館の由良濯氏、栗名彩香氏に大変お世話になりました。また、元興寺文化財研究所の山口繁生氏には、分析データの共有など多大なご助力を賜りました。末尾ながら記して感謝申し上げます。

## 参考文献

- <sup>1</sup>ハンサン  
李漢祥2006「武寧王の環頭大刀」『武寧王陵出土遺物分析報告書（Ⅱ）』国立公州博物館 pp.10-49（韓国語）
- 大谷晃二2006「龍鳳文環頭大刀研究の覚え書き」『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館 2004年度共同研究成果報告書』財団法人大阪府文化財センター pp.145-164
- 大谷晃二2016「御崎山古墳の獅嚙環頭大刀」『八雲立つ風土記の丘』No.219 鳥根県立八

(5) ただし崔は、CT装置の透過力不足のため不明確な部分があり、さらなる検討が必要であると慎重な記述に留めている（崔2014：39）。

雲立つ風土記の丘 pp.2-7

大谷晃二2018「岩田14号墳と金銀装大刀」『丘の上の遺跡群～山陽団地の発掘から～』赤磐市歴史まなび講座 第3回 講演会配布資料 赤磐市教育委員会

岡部裕俊・大谷晃二2015「西堂古賀崎古墳に関する新知見一墳丘・石室測量図の発見と単竜環頭大刀の詳細観察の成果一」『糸島市立伊都国歴史博物館紀要』第10号 糸島市立伊都国歴史博物館 pp.1-14

金宇大2019「木村定三コレクションM318単竜環頭大刀の検討」『愛知県美術館研究紀要』第25号 木村定三コレクション編 愛知県美術館 pp.73-79

金宇大2023「単竜・単鳳環頭大刀生産の拡大と外来技術工人」『古代武器研究』Vol.18 古代武器研究会 pp.51-66

国立公州博物館2011『武寧王陵を格物する』武寧王陵発掘40周年記念特別展（韓国語）

須山貴史・金原裕美子・青木智史・金原正明2023「古墳時代刀剣類の保存科学的調査(1) —吉備塚出土三累環頭大刀の材質—」『日本文化財科学会第40回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会第40回大会実行委員会 pp.126-127

<sup>チェギウン</sup>崔基殷2014「製作技術を通してみた武寧王陵出土装飾刀の製作地検討」『百済学報』第12号 百済学会 pp.35-68（韓国語）

長井正欣（編）2006『小泉長塚遺跡』群馬県佐波郡玉村町教育委員会・玉村町遺跡調査会  
新納泉1982「単竜・単鳳環頭大刀の編年」『史林』第65巻第4号 史学研究会 pp.110-141

図の出典（記載のないものは筆者作成）

図2：大谷2006に掲載の図をもとに筆者が再構成。外環文様展開図については、①・③は新納1982、②・⑤は大谷2006、④は町田章1997「伽耶の環頭大刀と王権」『加耶諸国の王権』仁済大学校加耶文化研究所、⑥は河上邦彦・松本百合子1993『龍王山古墳群』奈良県教育委員会、⑦は大谷2018にそれぞれ掲載の図を改変再トレース。

図3：武寧王陵刀の実測図は李2006を参考に筆者作成、外環文様展開図は図2に同じ。

愛知県美術館研究紀要 第30号 木村定三コレクション編

2024年2月発行

編集・発行 愛知芸術文化センター 愛知県美術館

〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2

Tel: 052-971-5511 (代)

<https://www-art.aac.pref.aichi.jp/>

 aomaa  
aichi prefectural museum of art

制作 共生印刷株式会社

Bulletin of the Aichi Prefectural Museum of Art No.30

Part2 Studies of The Kimura Teizo collection

2024

Edited and Published : Aichi Prefectural Museum of Art

1-13-2 Higashisakura, Higashi-ku, Nagoya 461-8525 Japan

Tel: +81-52-971-5511

Printed : Kyosei Printing Co., Ltd.

© 2024 Aichi Prefectural Museum of Art, All Rights Reserved.